

【エスタ・ビックの遺産：タヴィストックの乳幼児観察の歴史、その60年の振り返り】（2008）

Margaret Rustin

〔※註；この論文は、2008年8月にBuenos Airesで開催された【International Congress of Infant Observation】での講演で発表され、後に【International Journal of Infant Observation】誌上に掲載されたものであります。尚、Margaret Rustin は、1986-2008 の期間、Tavistock Clinicの ‘Head of Child Psychotherapy’ として職責を果たされました。〕

60年というのは精神分析の歴史においてもかなりの歳月といえましょう。ここでこうしてエスタ・ビックの際立った創案を幾らかでも振り返り、かつそれが現代においてどのように発展してきたかを論述することは時宜にかなっていると思われます。ここ最近、ビック及び乳幼児観察について一連の著作物が出版されております。そして精神分析に根差したところの観察という形態について彼女が叙述するところのインパクトはさらに高まってゆくように思われます。こうした国際的な学会は、子どもの観察の実践が文化的並びに制度的いづれにおいてもどのように違ったありようで位置づけられているかを検討するいい機会となりましよう。そして参加する人々が相当数であることには深い感銘を覚えます。このレポートではまずロンドンでそれが当初どのように始まったのかを振り返り、【タヴィストック】の過去並びに現世代の観察者たちの経験を手掛かりに語ってまいります。



[Esther Bick]

私はここでまず、おそらく誰にとっても基本的テキストと思われる Mrs.ビックの1964年の論文に触れて話を始めようと思ひます。これは、乳幼児観察の実践について公表された最初のものであります。乳幼児観察は、【タヴィストック】の児童サイコセラピー・トレーニングにおいてジョン・ボウルビーが彼女をコースの統轄者として招聘した1948年以降に発展したものであり、そして後に1960年にはロンドンの【Institute of Psychoanalysis】のトレーニングにおいても履修科目とされました。ここに私は彼女の明確な論点の幾つかを提示し、そのうちの或る特定な事柄については今日的な観点からコメントを付け加えることといたします。それと同時に、この論文がこのフィールドのイントロダクションとして依然として見事に明快でありかつ信頼すべきものであるということを強調したいわけでありまして、参考文献として頻繁に引用されているのは至極もつともと思われるのです。

さて、まず最初に私が申し上げたいことは、そもそもビックが乳幼児観察の機能とは何かをどのように考えていたかであります。それは精神分析的児童サイコセラピスト養成へ向けた彼女の献身的な熱意 commitment に密接に関わっていたということ、それは紛れもない明白な事実であります。彼女は、研修生に‘何らかの実際的に乳幼児を経験する’機会を与え、児童臨床に備えて下準備させようとしたのであります。そうした経験の裏づけがあつてこそ、子どもの患者が提示する臨床マテリアルの

中に‘幼子の要素 infantile elements’を感じとれるはずと目論んだことになり、それと同じ意味合いで、母親との面接で子どもの生育歴を聴取する場合でも、もしも母子ペアを長期に亘って観察した経験が聴く側にあれば、情緒的な困難を抱えた子どもについて母親がいかように語るにしても大いにそれらを理解する助けとなりましょうし、いたいけない幼子の傷つきやすさ vulnerabilities に直面し、母親が不安を覚えることにも容易に心を沿わせられるであろうと、そのようにも彼女は研修生に語っています。子どもについて聴取されることが専ら母親から与えられ、そこには子どもの父親は関与していないといった彼女の想定をここで振り返ってみますと興味深いわけであり、それは過去50年の間の家族生活および家族成員それぞれの責任意識といったものについて人々の考えが変化していることの指標ともいえます。今日では、われわれは概して両親ともが揃って臨床的懇談の場に積極的に関わってくれて、またそのように尽力を惜しまないことを期待いたします。ピックのこの件における期待感は、家族がともに暮らしている家庭のなかで観察者はどのような居場所を占めるかといったことについて語っているのとは対照的であります。そこでは明らかに彼女は両親共に言及しながら、観察者が訪問の度にいかにして適切な立ち位置を見出してゆくものか、その微妙ともいえる、またしばしば憂慮を強いられるような経過について述べております。ここではピックがその心の内で、普通家庭というのは概して人が出たり入ったりと複雑極まりないものであり、そうであるからして、観察者はその姿勢において観察の場に誰がいようとその流動性に対して常に開かれてあることが必要と考えていたように見受けられます。実際のところ、主たる観察として強調されるのは赤ちゃんの経験そして母親のそれであるわけですが、‘恩恵をいただくところの訪問者’としては、観察者は家族のどのメンバーともうまく触れ合うコツを会得しなくてはなりません。それからまさにピックの述べているとおり、観察者は家族との間にあって、意識的にもしくは無意識的に家族によって観察者に敢えて付与されるかもしれない何らかの役割を‘アクティング・アウト’しないことであります。もしくは観察者が早期の母子間の圧倒されるほどに密着した関係性を目の当たりにし、内なる幼児的な葛藤が隠れようもなく沸騰し、その結果としてそれを外在化してしまうといった内的プレッシャーについてもそれは同様です。

時としてピックの乳幼児観察方法はそのアプローチにおいて極端に厳格で堅苦しいといった誤った印象を与えてきました。でありますから、この最初の彼女の論文で、そこには多々彼女のアイデアが述べられておりますけれども、例えばもしも観察者が‘<よろしければ抱っこをどうぞ>’と勧められる場合赤ちゃんを抱っこさせてもらうのもよいでしょうし、家族との関係性が培われてゆくなかでごく自然に何らかの特別の機会にはちょっとしたプレゼントをすることがあってもよいでしょうと語られてますわけで、それを思い返しますとなかなか嬉しく感じられるのであります。

ここで彼女が伝えんとした指導要領について述べましょう。一つは、観察者と家族メンバーとの間に生じる‘幼児的転移 infantile transference’の問題がありまして、それは双方共にそうなのですが、それが絡むところの役割には観察者は頑として抵抗し、アクティング・アウトをしないということの重要性があげられます。と同時に、その場に全面的に心を傾け、出来る限り目の前に起きていることに対してオープンであろうとすることなのです。‘自由に浮遊するアテンション free-floating attention’、それ

は精神分析的実践においては通常ごく慣れ親しまれているところのものでありますが、ビックはそれを観察者に会得してもらいたいと願っていたわけです。即ち、それは適切に記憶されることがらの詳細に極力アクセスすることであり、またその一方で観察者自らの情動的反応 emotional response にもアクセスするということなのです。それらいずれもがその後に観察者によって回想されるでしょうし、またはセミナーの討議においても徐々に意識にのぼるといったこともありましよう。こうしたことは、勿論のこと、何故最初から彼女が観察中にはメモを取ることはお勧めしないと言ってるかに関係いたします。つまりそうした行為は研修生の注意力を阻むことになりがちで、だから‘母親の情動的欲求に容易に反応する’ことができなくなると彼女は警告しているのです。このことは、母親と子どもが差し向かいで触れ合うこと face-to-face contact がどれほど重要で必要不可欠かをわれわれに考えさせます。それはまた、その後のあらゆる親密さと理解を含む関係性についても然りといえましようが…。観察者の観察するまなざし、そしてそれが母親と赤ちゃんにしっかりと焦点づけられていることは互いの関係性を培う意味でとても重要です。成人を対象にした精神分析の場合ですと、その認識器官 perceptual apparatus に焦点づけられるのは主に‘聞かれたこと’そして‘語られたこと’であります。他方、乳幼児観察および児童セラピイの場合には、視覚的領域がよりいっそう中心を占めるわけです。そして‘見る’ことおよび‘見られること’の不安感は広範囲に亘りますし、避けられないものに思われます。すなわち目というのも、親しみが込められ、興味の注がれた目であったり、そしてすぐには決め付けない、‘疑問’の余地を残すといった目もありましようが、それとは対照的に、悪意ある目とか、覗きみる目、羨望の入り混じった目 green with envy などいろいろあるわけですし、こうして「見る looking」という活動範囲の全体を眺めると、目が‘受容 receptivity’というよりもむしろ‘投影 projection’の器官になっているといえなくもないのであります (Rustin, 1989)。

ビックは、いかにして‘客観的な’観察データを集めるかに心を砕いておりました。彼女が唱える技法上の提案はまさにこの点に絞られるといえましよう。2つの事柄が特に私に強い印象に残しております。その最初の一つは、観察者の好奇心は必ずしもすべて満たされるわけではなく、制約 limitations があり、壁にぶつかることもあろうが、それに耐えねばならないといった彼女の警告であります。つまりは、‘不可知なもの the unknowable’、‘謎めいたもの the mysterious’は、彼女の示唆するところによれば‘興味をそそり過ぎかねない’というわけです。この点むしろピオンに似ております (1962)。彼は真正の精神分析的探索において(患者および分析家にとっても)その基本的な構成要素として‘未知なるもの not-knowing’に耐えねばならないといった点を幾分強調している向きがあるわけですが、ビックもまた、我々が互いに好奇心で結び付こうとするニーズに注意を喚起するのであります。そうしたことが乳幼児観察では尚更に刺激されがちでありますし、それで得てして侵襲的となったり、また性急な独断に陥ることにもなったりといったリスクを彼女は考慮していたものと思われまいます。ビックがセミナーで指導する方法とは、観察対象のこころの状態、相互作用そして無意識のコミュニケーションについて可能な限りの‘仮定されることがら hypotheses’をひたすら詳述することでしかありません。そして月日を重ねたさらなる観察こそが、解釈されてきたものを確証するか、もしくはその誤りを明らかにするといった点で適正な根拠となることを彼女は語っております。証拠となるもの evidence は常に限られており

ます。ただ同じパターンが繰り返されるといった観察こそが、そこに形作られている関係性やら家族成員個々の内なる世界について或る程度確信してもいいと言えるための基礎付けになるわけでありませう。さて、さらに2つ目についてですが、ビックは全ての観察者は観察に携わっている期間中「パーソナル・アナリシス personal analysis」を受けていることが想定されると書き記しております。そうであればこそ、セミナーで観察のスーパービジョンと並行して、観察者本人の‘逆転移反応’を分析的に吟味検討していても一応大丈夫、支障はなからうと判断していたこととなります。「パーソナル・アナリシス」は、児童サイコセラピーおよび精神分析的トレーニングのいずれでも、その始まりにおいて着手されますわけで、乳幼児観察のトレーニング機能と首尾一貫しているといえましょう。

さてわれわれはここで、ごく最近の実践をかんがみますと、大変重要な「隔たり disjunction」に出くわします。ビックの論文に書かれてある詳細なる観察例の幾つかについて論議するまえに、これについて言及してみましょう。特筆すべきことがらとして2つの‘逸脱 divergence’があげられます。まずその最初に、UKの外では、乳幼児観察は早期の精神的発達および早期の対象関係を研究する方法として興味を持たれ、それで精神生活の始まりそして母子関係性をリサーチするためにしばしば資格のある精神分析家がこの方法論を実践しているという事実があげられます(Sowa, 2002)。また‘早期予防 early interventions’の試みとして、‘応用的な乳幼児観察’において臨床的可能性を探索することに人々の興味が高まっているということもあります(例、Boyer & Sorensen 1999)。もしも観察が資格化後の職業的向上の一部としてある場合、並行してのパーソナル・アナリシスは期待されることはありません。そうした場合には、自己分析的な能力 self-analytic capacity 並びに乳幼児観察セミナー・グループとの組み合わせが、観察者自らの逆転移の問題に対処するべく相応の作業を為すものとして想定されているわけでありませう。

【タヴィストック】の伝統を振り返りますと、ビックのかつての実践とは異なる方向への発展が見られます。1970年代にビックの弟子であったマーサ・ハリス(Martha Harris)がその類い稀な才能を認められ、ビックから【タヴィストック】の児童サイコセラピー・トレーニングの運営を引き継ぎました。彼女は、児童ならびに青年期 adolescents の若者たちと一緒に働いている、より広い領域のプロフェッショナルにとって‘精神分析的参照枠 a psychoanalytic frame of reference’へ向けて観察をベースとしたイントロダクションがあれば何らかの益がもたらされるに違いなからうといった抱負から、それを实地に試みたのであります(Harris, 1987)。彼女の考えでは、それによって彼らの仕事が豊かになり、より広い精神分析的カルチャーがコミュニティの中に培われ、そして子どもたちやその家族にも恩恵がもたらされるということなのでした。彼女は児童サイコセラピーのトレーニングの「前・臨床的 pre-clinical」な要素であったもののバージョンを拡張したことになります。そしてこれはその後長らくGianna Pokacco Williams主宰による「コース」となった次第であります。それには本来のコースとかなり類似した方法論を用いての2年間の乳幼児観察および1年間の児童観察 young child observation のみならず、精神分析理論および児童発達論の学習セミナーがあり、さらには2年間のワーク・ディスカッション(Work Discussion)セミナーもありまして、そこではそれぞれの研修生が職場で(例えば、養護施設、

保育園、学校、特別支援教育、病院、クリニックなど) 従事している仕事内容の詳細をさまざまな文脈で語ってゆくわけであります。こうしたセミナーは臨床症例のスーパービジョンおよび乳幼児観察の方法を利用しており、新しい学習形態をつくってきたともいえましょう(Rustin & Bradley, 2008)。

そもそもこうした大胆な企てには、トレーニング・コースへの応募者の中には潜在的には充分適性をもちながらパーソナル・アナリシスを受けられずにいる人がかなりの数いるという認識があったものと考えられます。その殆どは報酬の低い職業に就いており、分析を受けるだけの経済力を持たずにいたわけであります。しかしながらマーサ・ハリスは、語用論 pragmatics を超えたところで、精神分析に人々が深く共鳴しコミットするのは、それは往々にしてわれわれ成人の生きざまにおいて‘幼子的要素’が重要性を帯びると認識されるに至った結果であるわけで、そうした事実はしばしば乳幼児観察、精神分析思考、それに自己満足 complacency の創造的障害といった可能の実態にも隠れようもなく露わになりますから、それらを認めるならばいずれ何らかの端緒になろうとの確信を抱いていたものと考えられます。

こうした変化には、おそらく乳幼児観察という教えが普及し、その範囲 scope が広げられてゆくことに伴うリスクに対してどのように責任を引き受けるかという課題が含まれるでしょう。この件ではかなり熟考が重ねられてきたといえます。明らかに当面取り組まねばならない2つの課題があります。まず一つは、観察が何らかの困難にぶつかったとき、そこで引き起こされる心的痛苦 distress に対して観察者並びに家族が抱くところの傷つきやすさ vulnerability という面であります。2つ目は、乳幼児観察セミナー・リーダーをより広く確保するためにいっそうのリーダー養成がはかられねばならないという問題です。研修生の保護のためには、まずは適切なパーソナル・サポートが要るでしょうし、それと並行して誰がいつ観察を始めるのがいいのかを決める厳密なガイドラインが要請されましょう。サポートに関しては、研修生各自にはパーソナル・チューター(個人指導教官/personal tutor)が付いていますし、そうしたシステムが活用されましょうが、それ以外にも勿論或部分コース全体の統合的かつ知的に首尾一貫したところのセミナー・プログラムをとおして得られるとあっていいでしょう。研修生は、少なくとも週に2つほど、5名ほどの小グループのセミナーに出席することになります。乳幼児観察およびワーク・ディスカッションです。それと同時により参加者の多いグループとなりますが、理論について学ぶセミナーがあります。この研究機関にはまた素晴らしい図書室もありますし、かなり多くの「シニア児童心理セラピスト」がおりまして、彼らの職責は臨床業務に携わりながら、「観察コース the Observation course」および「児童心理セラピー臨床トレーニング the Child Psychotherapy clinical training」の指導的立場をも兼ね備えております。観察者の適性についてはそれほど問題になることはありません。なぜならコースに来る人たちは事前に個別に面接を受けており、そしてすべてが応募の段階でその必要条件として児童もしくは青年期の若者たちに携わる職業に従事しているからであります。(但し、今日ではこれに加えて、全員誰もが警察の検閲を受けることが規定されています。昨今大人が子どもに対して何らかの損傷・害を与えることの不安が公衆の関心を引いていることがあり、それで取り締まり強化という事態になってきているためです。)しかしながら、時としては問題を抱えている個人もいなくはありません。セミ

ナー・リーダーが或る研修生が観察者として適当でないと見做す場合には(それは研修生の感動的な傷つきやすさであったり、もしくはその観察者が家族に与えるインパクトを考慮してといった場合ですが、おそらく観察を当分差し控えさせるべく配慮いたします。研修生はセミナーに通い続けることはできますし、その後の事態については逐次検討されてまいります。その結果時たま人によっては観察の機会を与えられずに終わってしまうという事態もありましょう。それよりもしばしば想定されることとしては、セミナーを1年ぐらい経た頃、チューターからの援助も得ながら、もしも研修生が尚も先に進みたいとしたら個人的にパーソナル・セラピー personal therapy を受けるよう勧められます。そうなりますとその研修生は観察を始めるということが可能となるわけです。観察を遅らせるよう提言される事態というのは、個人的な問題を抱えていると懸念される研修生に限らず、ごく最近子どもを出産したばかりだとか、留学生で、それで語学的にごく限られた能力しかないといった人たちも含まれるでしょう。ここ何年にも亘ってタヴィストック・コースで取り組まれた何百という乳幼児観察において、観察者の抱える何らかの個人的制約 limitations ゆえに家族に困難をもたらしたと見做される例がごくごく僅かなのは注目に値します。私はここ21年間【タヴィストック】の児童サイコセラピーを統轄する立場にりましたが、観察される側の家族から苦情を承ったのはたった一件でありました。

いずれ後にセミナー・リーダー養成という課題に話しを戻しますが、改めてこの時点でビックの論文についてお話をさせていただきます。そこには2つの観察事例についてわれわれの感慨を大いに呼び覚ます解説がご覧いただけます。母親の、当初の躁的で意気揚々といった気分から、その後に陥った抑うつ傾向がどれほどのものであったのか、その衝撃に焦点づけて彼女は語っております。ここで‘部分対象関係性 part-object relations’への退行といったエレメントに言及し、さらにはより統合された心的機能の崩壊、そしてクラインの、‘抑うつ態勢’の特徴とされる不安感の理論的意味での鬱的傾向にも言及しております(Klein, 1935)。彼女は、こうした事態が観察者にとってとりわけプレッシャーになるであろうといった観点から2つその特徴を語っております。一つは抑うつ的な母親を‘元気づけてやろうとすること’であり、他には‘赤ちゃんの怒りに同一化すること’であります。ここに観察者が母親の心的状態並びに赤ちゃんのそのどちらへも反応することで否応もなく惹起される‘二重のプレッシャー’が覗われます。

ここで提示されている最初の事例の中で、ビックは観察者が‘依存的役割’へと引き込まれるように感じてしまうといった問題を殊更に取り沙汰しています。これについて彼女は、観察者が母親にそれから赤ちゃんにも同一化して気持ちがあちこち揺れ動くことから生じると定義しています。そうなりますと、観察者はその独自の立場を堅持する感覚を失いがちになるわけです。そうした自らの立脚点があつてこそビックが狙いとする客観的な観察を為し得るとのことなのであります。人は己の中に‘主観的なプレッシャー’を意識するときに(それは、むりやり‘行為化 acting-in’させられる方向へと軽く‘小突かれる’といったふうに敢えて申せましょうが)、観察の正しい定位置に自らを落ち着かせることが辛うじて可能になるのであります。このことは、セミナー及びセミナー・リーダーの役割がどれほど重要極まりないものであるかを指し示しております。

ビックの2つ目の事例で、母親の抑うつ感が観察者にどのようなインパクトを及ぼしているかが探究されています。この事例は少し時間を経てからその経過が振り返られておりますが、その際彼女は、子どもの行動のパターン、さらにはそれらパターンの変化がいっそう鮮明にはっきりしてくるためには是非とも観察は継続的であらねばならないと、その重要性を強調しております。彼女は、赤ちゃんが2つのオッパイに対して異なったふうに関わることを指摘して語っております。そして赤ちゃんが服を脱がせられたとき激しく泣くことの意味についても語っております。彼女は、母子間におけるコミュニケーションの2つの異なった形態を描写しています。赤ちゃんの幸福感の源ともいえる視覚的・音声的な接触といったもの、それからとても静かで、だが折々に母親にそして後には哺乳瓶にも手を伸ばして触ろうとする赤ちゃんの運動感覚的行為であります。われわれはこれらの文章を読みながら、実際にビックのセミナーにいるかのような錯覚に襲われるのであります。そして思いますに、乳幼児観察についての最良の書とはどうやらそうした特色を帯びているといいようです。例えば、マーサ・ハリス が Romana Negri の観察をスーパービジョンした当時の記録が最近出版されましたが、それがまさにそうでありませぬ (Negri & Harris, 2007)。

ビックの意図は、観察された盛りだくさんの事象をとにかく集めることであり、やがては全体の動きとその傾向についての心象イメージがもたらされるといったことであります。彼女が強調するところは、それら心象イメージが積み上げられ、時を経るうちにそれら盛りだくさんの詳細の中から何らかの筋立てが浮き彫りになってくるということなのです。それは、Josephの後年提唱した概念《total transference》(Joseph, 1989)を私に呼び起こします。事実、乳幼児観察セミナーの2年間に亘る営みにおいてしばしば観察された経験のエレメントが徐々に統合されてゆくのが可能になってまいります。【タヴィストック】の研修生によるところの観察した赤ちゃんが2年目になったときに書かれたレポートを眺めますと、大概のところそれらは赤ちゃんが育む関係性についての実に説得力のある‘物語’となっているのです。そこには観察者の主観的経験内容がうまく織り込まれて、さまざまな理解に至っていることが実によく了解されます。昨今乳幼児観察についての出版物はますます活況を呈しております、【the Infant Observation Journal】やら、他にも多々ありますが、それというのも乳幼児観察という方法の信頼性に今やわれわれが自信を抱いていることからもたらされた結果ではないか、そう私は考えております。そしてそれはまた、われわれのコースが【the University of East London】によって「Masters」の学位を認定される運びになって以降、乳幼児観察をめぐる著作物の質が格段に向上していることからもたらされたといえましよう (Briggs, 2002; Reid, 1997; Sternberg, 2005)。

ビックが自らの方法について実際どのように語っていたかを検討するべく、私は出版物以外で至極興味深い情報源ともいべきお三方にアクセスを試みました。Mary Bostonは、1948年の最初の乳幼児観察セミナーの参加者の一人であります。そして彼女は私に、ビックのアイデアがどのように展開していったかを縷々語ってくれたのですが、その物語は、いかにも進化 evolution というものに対しての彼女の開かれた姿勢といった点で実に魅力的な証拠と思われました。彼女は3人の研修生から成るグループで乳幼児観察セミナーを開始したわけですが、まずは保育園で養育されている赤ちゃん

の観察に取り掛かったとのこと。なぜならその当時は観察者が普通の家庭において赤ちゃんを観察させてもらうといった可能性について誰とどう交渉したのか、その術が思いつかなかったからであります。どの研修生も、ビックのたいそう詳細にこだわる姿勢に是非にも沿わねばならないということが念頭にありましたから、ひどく神経質になっていたんだそうです。が、やがて皆誰も観察された赤ちゃんの発達を追うに従い、ビックに熱中して打ち込むようになっていったようです。Shirley Hoxterが語ったところによりますと、それから幾年か経て、家庭内での赤ちゃん観察を実施する運びとなったとのこと。Mrs. ビックがShirleyの観察する家族を手配してくれたわけ。事実として、Mrs. ビックとその家族とのプロフェッショナルな繋がりがShirleyにとっては不安材料でありました。乳幼児観察当初は、児童精神分析についてもそうではありますが、‘境界的しきたり boundary conventions’ というものが厳密にあったものと思われ。さて、Dilys Dawsについて申しますと、1964年の論文から彼女が手掛けた観察のあらましをご覧いただけますが、彼女が乳幼児観察をしたとき、Mrs. ビックはセミナーでその最初の年のセミナーを指導し、そしてジョン・ポウルビイが引き継いでその2年目を指導したということ。彼ら二人のパースペクティブはかなり相違しておりました。彼女が心の内なる発達および無意識的空想にひたすら焦点づける一方で、彼は外界のできごと、アタッチメントの先駆的なものに対して、そして行動レベルでの児童の発達によりいっそう注目していたから（彼は彼の仕事を着手し始めつつあったわけ）。これは研修生にしてみれば、大変難儀ともいえる経験でありましたでしょう！彼女らはどうやらポウルビイと論争をした模様であります。といいますのは、彼女らはビックの唱える精神分析的参照枠に相当コミットしていたからでありますし、彼のアイデアをまるで理解しなかったからです！（これはD. Dawsからの個人的な情報です；2008/06/10）。それで後に、コースにおける彼の指導は乳幼児観察セミナーとは別個とされたわけ。であります。

Dilys Dawsがご親切にも1960年に催されたセミナーでのディスカッションを書き留めたノートに私に貸してくださったのですが、その中でMrs. ビックは、5名ほどのセミナー・グループで観察された赤ちゃんたちの一人サムの成長を振り返っております。そこではまず初めに、乳幼児観察の方法についての包括的な回想がされております。すなわちそれらは、訪問を継続してゆくならば、週に1時間という観察の制限枠は全然問題にならないということ、観察者は赤ちゃんの行動を綿密に記録し、その感情を推し測ることに性急すぎずならず、それで解釈の根拠となるはずの目の前の証拠 evidence を見落としがちにならぬよう充分慎重かつ細心の注意を払わねばならないということ、そして観察者のコメントは観察資料を高めることもあるし、もしくは損なうことにもなりかねないので、それらは絶えず注意深い吟味に委ねられねばならないといった事柄です。彼女はまた、或る特定の赤ちゃんの行動をさまざまな状況を比較検討しながら観察してゆくことで多くを学ぶことができる一方で、数多くの赤ちゃんたちに接するならば、乳幼児期に普通によくありがちな経験についても、また同時に極めて広範囲にわたる子ども銘々の個別的違いについても徐々に目が開かれてゆくということを指摘しております。

それから生後10ヶ月目のサムについて検討してゆきます。とても動きの少ない、おとなしい赤ちゃんというふうに語られております。ビックがその彼の‘おとなしさ placidity’ について語っていることには瞠目さ

せられます。他の誰に対しても、もしくは彼自身の身体のそれぞれ違った部分に対しても彼の気持ちが届こうとはしていない、そうすることにまさに彼はしくじっている、と彼女は語っています。そしてこのことを、母親が最初の3ヵ月において実際に彼女という存在にインパクトを与えるようなことを赤ちゃんにさせていなかったからだとも母親側の問題に繋げております。サムは、その腕の動きにおいて極めて抑制が強いように見受けられました。そしてピックは、ここに‘命を謳歌する能力の低さ a low capacity for enjoying life’が示されていると考えます。普通だとよくある幼児的な身体的動きがサムには見られない事実に着目しながら、これは経験を受け止め理解し、そして取りくんでゆく上での挫折、つまりは困難を得てして無視してしまう傾向が彼にあることの証拠であろうと示唆しております。

サムは誰とも間近な目と目のコンタクトを避けがちでありました。そしてピックは、彼の目は彼にとってこの上ない重要な器官であって、すなわちその目が彼の環境をそのままそっくり吸い尽くすのであり、また彼の攻撃性 aggression を筋肉並びに口から分裂させ、目で表出するといった具合に彼はそれを用いているとピックは示唆しております。これらのコメントからわれわれは彼女の考え方というものについて実に鮮明な印象を受け取れるわけであります。それはセミナー・メンバーとの対話という形式になっておりますから、とても開かれた類いのものといえましょう。

後に(私が乳幼児観察を始めた頃のことですが)、マーサ・ハリスがMrs. ピックからセミナーを引き継ぎまして、また他のピックの薫陶を受けた方々も指導に携わり始めたわけですが、どなたも彼女の【タヴィストック】方式の乳幼児観察モデルに準拠しております。一方で、それとは別個に他にも2つの発展がもたらされました。一つは、ロンドンにおける【精神分析的トレーニング・コース】に1年間の乳幼児観察が導入され、履修科目とされたこと。そしてもう一つは、海外から人々が観察そして臨床的方法を学びにピックの許にスーパービジョンを受けに訪れてくるようになったことでもあります。

こうした事実から、われわれを乳幼児観察の教師陣 teachers をどのように育成するかという問題に取り組みざるを得ないことになったわけであります。皆さんもよくご存知のMagagnaの1987年の論文ですが、あのセミナーはそもそも資格取得した児童サイコセラピストたちによって要請されたものでした。彼らは全員トレーニングの一環として2年間の観察をすでに修了しております。ピックにとってそうした乳幼児観察セミナーを開くということは、一つにはそれら参加者にいずれ指導者としての技量を身に付けさせるべく、それを援助するという意図があったわけです。Magagnaの論文ではその方法において常とは違う或る重要な変化が覗われます。そこでは唯一つの観察事例のみが提出されております。当初は少なくとも2つの観察事例が予定されていたようですが(おそらくグループの人数が普通の方法でゆくには多すぎたからでしょう)。さらには、毎回その前のセミナーでのディスカッションの総括点が振り返られております。これは新しいアイデアです。こうした実践は今でも為されることもありますが、伝統的な少人数のセミナー・グループではすべての乳幼児観察の指導者が採用しているとはいえません。それから、赤ちゃんはその名まえではなく、ただ‘赤ちゃん baby’として言及されています。それでどちらかというむしろ‘赤ちゃんの典型 archetypal’といった雰囲気醸(かも)していることになります。もっと

びっくりさせられますのは、セミナーのメンバーがほとんど押し黙ったままであったということであります。それは誰もがこれがビックの最後のセミナーであることを承知していて、だから彼らは彼女が言うところを一言一句聞き逃すまいとしたということだと推測していいでしょう。このセミナーで唯一の観察者であったMagagnaはどんなにか孤独に感じたことでしょう。なぜなら、彼女は毎週提出しなくてはなりませんでしたが、観察中の一挙一動にグループの眼が注がれ、我が身を晒さなくてはならなかったのですから。Magagnaは、家族のうちで己れの占める役割について、さまざまに批評家、外部者、侵入者、そして母親と競うエキスパートといったぐあいに折々に敏感に察知することがあったことや、赤ちゃんとの同一化ゆえに自らが傷つくこともあり、時には共感 sympathy を覚えるあまり病を得ることがなくもなかったということをも率直に書き綴っております。

さて、今この時点でさらにわれわれは新しい教師陣 teachers をどのように養成してゆけばいいと考えべきでしょうか？【タヴィストック】ではこれまで幾通りかの方法で取り組んでまいりました。マーサ・ハリスは、初めて教官となって心もとなく覚える人たちを集め、スーパービジョン的なディスカッションの場を提供したり、また彼女のセミナーに同席させ、セミナーの動きを、それに参加しながら観察させるといった機会をも提供しておりました。彼女はまた、2回目の乳幼児観察をする人々が集うグループから成るセミナーをも開いております。そのようにいつか教師陣に加わる未来に備えて彼らを啓発していったわけであります。そうした同様の取り組みがそれぞれに違った場所で引き続き発展しております。そしてここに一つわれわれの最近の試みを加えますと、新規の教師陣に向けて開かれるセミナーがあります。そこではそれぞれが率いるセミナーに提出された観察資料とともに、それらセミナーのプロセスのあらましが綴られた彼ら自らの説明メモが提出されます。これは結局のところ、なかなかとても素晴らしい学びの経験であることがわかりました。それから我々はビデオ・カンファレンス・リンクを活用し、教化普及のためロンドン以外へ向けてもわれわれのセミナーを開放することをしております。

ここで私は他に幾つか重要な課題を取り上げます。乳幼児観察にまつわる最近の発展について私がどのように考えてきたか、以下の4つの観点から述べてまいります。一つは、過去60年ほどに亘る社会的変動に関連して観察セッティングに変化がみられることです。ビックの早期の観察者の世代が通った家庭は両親共が揃った家庭でありました。大概が裕福な中流家庭 middle-class であり、また幾らか安定した労働者階級 working-class の家庭です。現在では観察者はもっと幅広い経験を余儀なくされております。ロンドンは、他民族および多文化的なシティとなっているのです。或る地域ではかなり高い比率で移民が暮らしているところがあります。これは、英語が二次的言語である家庭、英語をうまくは喋れない、もしくは普通日常的に家庭内では英語は話さない、少なくとも家族の年輩の人たちは全然といった家庭状況での観察へとわれわれは足を踏み入れることになるわけです。例えば、インド亜大陸からの家族の出身である子どもたちですと、母親が英語を学んだことなどまったくなかった場合がありましようから、しばしば英語を学校で初めて習うこととなります。そこで観察者は、日頃自分が慣れ親しんでいるのとは違ったふうに家庭生活を送っている家族に対して幾分まごつくこともありましようから、そうした家族の中であって己れの位置を見定めるにはいろいろ微妙なところでうまく折り

合いを付けてゆく必要があります。Cathy Urwin率いるリサーチ・プロジェクトは、イースト・ロンドンに住む、それぞれ違うエスニック・グループから第一子を出産した母親たちを選び、その経験を調査しておりまして、その一環として乳幼児観察が用いられておりますが、こうした研究分野から随分と興味深い、ごく詳細なる資料が提供されております (Urwin, 2007)。

昨今われわれの目に留まったことは、観察者を熱心に迎えてくれる家族のうち、ロンドンに移住してきて間がない家族の比率が高いということでありまして。郷里から遠く隔てられ母親には家族のサポートが無いということが想定されます。観察者は長期に亘って定期的に訪問し、赤ちゃんの成長に密接な関心を抱くといったふうに深くコミットするわけで、幾分それはおそらく母親にとって失われた近親者といった家族の身代わりとも感じられるようであります。観察者への転移といった観点からしますと、それは新規でかつ挑戦的な領域と見做していいでしょう。こうした家族は得てして極めて脆く傷つきやすい場合があるようです。Stephen Briggが1977年の研究でこの点を調査しております。そこではGianna Williamの掲げるところ‘薄っぺらで、凸凹状’といった「コンテイメント理論」が援用され、早期の母親のコンテイメントにおける躓(つまづ)きの現象について入念な論述がなされております。

他の社会的変化を述べますなら、ブリテッシュ・シティではシングル・マザーの比率が高くなっていることがあげられますし、父親が子育てに直接関与することが断然増えており、それに中流階級の専門職にある人々のなかではナニーとかナーサリーに子どもを預けることが格段に増えてきております。これらの場合、母親たちは個々それぞれの期待感から、また時には経済的必要性から、産休後に職場復帰しております。また援助出産および養子縁組をとおして、レスビアンや同性愛者のカップルでも赤ちゃんを育てることは可能になっているわけでありまして。すべてこれら現実には、観察実践の広がりの中で時を経て表面化してきたように思われます。セミナー・リーダーは、研修生の観察開始に備えてどのように指導すべきか、しばしば難しい決定を迫られます。なぜなら個々それぞれに望む家族については往々にして選り好みがあるものですし、それも己れの価値観やら、信念もしくは不安感などが密接に関わっているともしえましょうから。ごく典型的な現代のセミナーにおいても、その発表される観察資料からさまざまな領域に光が当てられるわけですし、いわばこうした‘社会学的レンズ’ the sociological lens’は、それを家族の心の内側 interior についての精神分析的研究にさらなる付加物として活用しますならば、それはそれでとても魅力的であります。そして勿論、ビックの方法論にとっても尚いっそうの学際的な関心と呼び覚ます情報源の一つになるわけでありまして (Hollway, 2007)。

次にここで簡単に触れておきたいことは、セミナー・リーダーのテクニクの変化という重要事項であります。これは大きなテーマであります。私が興味を抱いているのは、例えばセミナーの開始に当たってロール・プレイを導入することです。そのようなかたちで研修生を初めて両親と会うことに備えさせたり、もしくは手の掛かる2、3歳児が赤ちゃんの傍らにいるといった場合にはどう対処するかといったことを想像させてみるわけでありまして。乳幼児観察が参加者のどなたにもまだ全然馴染みがないとか、観察する家族がまだ見つからないでいるといった状況では、セミナー・リーダーが時には自らの観察資料を最

初のセミナーで提出することもありましょう。そうした経験が観察者にどのような情動的なインパクトをもたらすものか、参加者にちょっと‘味見’してもらおうことになるわけです。出版されているテキストを用いる方もありましたが、実のところそれは研修生を、まだ編集工程を経ていない、一見取り散らかった messier ともいえる生の観察データではなくて、どちらかというと既に理論化された資料へと導いてしまうわけですから、それはむしろ大なる不利益 disadvantage と見做されましょう。心理実験に基礎付けられた児童発達やらアタッチメント・リサーチの拡張 (Stern, 1985)、並びに神経科学 neuro-science、進化論的心理学 evolutionary psychology、そして人類学 (Panksepp, 1998; Hrdy, 2000) には、それらの研究成果から生み出された理論があり、乳幼児観察の教師陣のなかにはそれらとリンクしようとされる方たちもおられます。だが私の見解としては、それは「精神分析的理論」への早過ぎる導入と同じく、不利益をもたらすものと言わざるを得ません。と言っても、乳幼児観察の資料を読み解くわれわれの反応は実際のところ、パワフルな理論的概念によって基礎付けられ形成されていることを十分に意識しておく必要性がありましょう。コンテインメント containment、投影同一視 projective identification、分裂 splitting、無意識的空想 unconscious phantasy、自閉的現象 autistic phenomena 等々、そうした理解を抜きにしてわれわれの解釈的行為は不可能なのであります。

乳幼児観察からさらに独創的に発展していったものとしては、その臨床的応用があげられます。特に子どもに対しての早期介入 early interventions です。それらの活動には、母親と赤ちゃんとの間の主たる困難に回答すべく伝統的な観察を‘参加型’へと適応させたものがありますし、母親と子どもとの絆を培うため自宅でのより能動的な観察形態をとるリサーチ的な仕事があります (Gretton, 2006)。ひどく深刻で危うくなっている母子カップルを訪問することに観察者がどれほど耐えられるか、その心が痛むこともありましょうし、またそれで無関心に陥るといったこともありましょう。個別のスーパービジョンの必要性は明らかであります。これらの高度ともいえる特殊な介入は、勿論すでに普通の観察を経験済みの、トレーニングを受けた臨床家にのみ該当します。乳幼児観察の臨床的な関連性として、通常の発達面で何らかの困難を来している赤ちゃんそしてその母親に短期的に関わることについては広くよく知られておりますし、出版物もたくさんございます (Emanuel & Bradley, 2008)。同様に周知の事実としては、観察を自閉症児及びその家族との臨床に活用することがあげられます。これには長期に亘る家族アセスメントが含まれますし (Alvarez & Reid, 1999)、並びにまったく話さない自閉症児たちとのサイコセラピーもそうです。その場合には密接な観察こそが臨床家にとって了解するための主たる源 resource であります。ビックは後に《二次的皮膚 the Second Skin》という理論を発展させましたが (Bick, 1968)、それは昨今、生い立ちの早期に育児放棄された子ども、もしくは虐待を受けた子どもらを対象としたところの児童サイコセラピストらの臨床経験から広く応用可能であると支持されております。そして、自閉症に関する Tustin そして Meltzer の理論のいずれもが、ビックによる乳幼児期についての理解からその主たる方向性を受け継いだといえるのであります。

さて、このジャーナルの読書層の皆さん方は、私が提供したところの概括的な解説よりももっと詳細な資料に精通しているものと思われまので、ここに一つだけ事例をお聞かせしたいと思ひます。17ヶ

月で養子縁組された、歩き始めたばかりの幼い子どもとその母親に対しての最初の介入であります。私が初めて彼らに出会ったとき、テッドは生後20ヶ月目でした。両親は打ちひしがれており、悲観的で、この先どうなることかと暗澹たる思いでいました。テッドは過活動 hyper-active であり、極端に攻撃的で、ものを絶えず投げ散らかし、唐突に叩いたり噛み付いたり、そしてまるで動物みたいだと評された甲高いかなき声をあげることも出来ません。家にはもう一人3歳半の男の子がおりまして、その子も養子でしたが、テッドをひどく恐がっていました。彼は睡眠が浅く、この家に到着した時点で悪いことに両親共肺炎に掛かってしまうということがあり、それで事態をいっそう混乱させたともいえます。両親は、幼い男の子というよりもまるで‘怪物 monster’を自分たち家族のうちに連れ込んでしまったというふうに内心感じておりました。彼を精神病的もしくは自閉的と考えたのです。最初のコンサルテーションにおいて、テッドの行動は確かにとても粗暴を極めており、玩具はミサイルとして使われるばかりでした。絶えず大人が警戒していなくてはならず、しばしば彼は暴力に訴えることがありましたから、両親はテッドの相手をしながらもむしろ拒絶されているというふうに感じておりました。しかしながら、ほんの少しの間ここで彼は静かになり、床の上で父親の膝にもたれかかりながら哺乳瓶から飲み物を飲んでおりました。私は、テッドが扉に関心が向いていることに触れ、彼が絶えず誰かに付き従ってもらい、それでしっかりと守ってもらいたがっていること、そしてママとパパ、それから私にもどんなに彼が恐がっているのかを知ってもらいたいと思っていることを語りまして、それでどうにかテッドとのコンタクトが取れたように感じたのであります。私はこのように彼の行動をそれが意味を持っているかのように描写してみせたわけですが、それについて両親は大いに懐疑的でありました。そこで、私は或る介入を試みることに決めます。柔らかな赤ちゃん人形を膝の上に乗せ、その子をテッドが飲み物を飲んでいる方へ向かせました。それからくこの子はね、お腹がすいてる。だから飲み物が欲しいの>と言ったのです。すると両親がびっくりしたことに、テッドは立ち上がり近寄って来て、私の前の低いテーブルの上に置いてあった玩具のティーカップから‘想像された飲み物’をその子に差し出したのです。普通の歩き始めた子どもですと、この頃にはもうこうした‘ふりをする遊び pretend-play’は可能です。そしてこのことが、両親にテッドが‘心を持つ子ども’であり、そして了解可能な相手でもあることを認めさせたように思われます。こうして希望が蘇ったことは、この家族と一緒に仕事をしてゆくうえで最初の、とても重要なことなのでした。

ブリテンにおける養子縁組においては、複雑な状況において生じる諸々の問題に専門職が介入することはノルマとされており、幾人かの私の同僚がそれに関心を抱きまして、臨床的なりサーチ・プロジェクトが企画されましたが、そこには将来の措置が未定であるところの里親に預けられた赤ちゃんの観察も含まれています。そこで期待されますことは、赤ちゃんの子育てによりいっそう密接に関われるように里親(母親)をサポートすることであり、またそれら子どもの多くは肉親 birth parents に戻される可能性は不確かで、何年にも亘って里親のケアに留まることになる場合もありますので、子どもたちの将来の措置を検討するソーシャル・ワーカーに対してコンサルテーションをしてゆくといったこととなります。目下のところ傾向としては、子どもたちの根底に潜む困難性はどうか彼らが5歳になって学校に入学する頃になってようやく明るみになるといえます。その時になって、学習すること、遊ぶこと、そして他の子どもたちと関わる上でも、その能力の欠如は痛ましいほどに明瞭に表れるからです。

ここでもう一つ最後に、或る最近試みられた冒険的な企画について述べます。BBCが【タヴィストック】の業績を巡って6つのテレビ番組を企画しました折、乳幼児観察をぜひその一つにしたいと熱心な要望がありました。これについてわれわれは熟考を重ねまして、結局のところ2つの観察例が交渉され、1年間の観察期間に亘り週ごとの撮影がアレンジされたわけなのであります。そしてこれら2つの観察例が提出されたセミナーの撮影についても同意しました。このようにして乳幼児観察への認知度がブリテンのテレビ視聴者に高まったということになります。その後も引き続き、われわれはBBCのフィルムを一部活用することでわれわれ独自の教育的フィルム【Obsevation Obseved】(Rustin & Miller, 2002)を作りまして、今やそれがDVDでご覧いただけます。乳幼児観察の基礎的なアイデアを巡っての解説、そして2つの観察録画の抜粋の組み合わせになっております。

結論

これまでわれわれが受け継いだところのビックの‘遺産’についていろいろ述べてまいりましたけれど、それも当然ながらごく僅かばかりのあらましに過ぎません。【タヴィストック】の私の同僚からも、そして乳幼児観察が実践されている世界中の他の多くの皆さん方からもさらに付け加えていただくことが多々ありましょう。ビックは彼女の創案したものへの関心が人々の間にかくも広がっていることにさぞかし驚かれます。私がここで皆さん方に是非ともお伝えしたいのは、彼女の企ての核心にある‘発見することのセンス the sense of discovery’であります。子どもの早期発達における事実 facts の発見、そしてその探究にあたっての精神分析に基礎づけられた方法論の発見、そのいずれにおいても・・・ビックにとって、それは児童及び成人との分析的臨床ワークと同時並行的でありました。彼女の存命中に乳幼児観察に携わった人々の数は極めて僅かといえましょう。しかしながら、早期の乳幼児の生活 early infantile life について人々の理解を拡げたいという彼女の熱烈な意欲は「クライン派理論」に立脚していたわけなのであります。実にこのことは、私が臨床例のスーパービジョンをしてもらっているとき、彼女が絶えず強調して語っていたことであります。因みに、私がスーパービジョンしていただいた2番目の症例は精神的な幼い子どもでありましたが、未熟児として誕生し、身体的な迫害 persecution の経験は熾烈でありました。その子を理解する上でMrs. ビックは私を大いに助けてくださいましたが、彼女は私の患者の棲息するところの何とも不可思議な内的世界に深く感情移入し、しばしば自分の手を使いながらそれを私に示してくれましたが、その指先はなんととも奇怪な動き方をしたものです。そこには、まさに私の患者が‘自己消滅の原始的恐怖 primitive fears of annihilation’から我が身を守らんとあがく姿が活写されておりました。絶え間ない落下の恐怖 terror、それをビックはごく普通の幼い赤ちゃんの恐れ fears の一部でもあると理解しておりました。実にそれこそが私の患者の生命を圧倒し脅かしていたことになりましょう。ビックの業績は、ピオンが‘思考する能力 the capacity to think’の早期発達をテーマに著述活動していた同じ時期に重なります。そうした精神分析的パラダイムにおける大いなる革新は、《ブリテッシュ・精神分析》の輝ける豊饒の時代的一幕といってもいいでしょう。乳幼児観察から得られる洞察は人間一般に通ずるといったビックの熱情溢れる信念には深甚なるものを感じさせられます。そうであればこそ感銘深くもそれは世界中に行き渡り、そして尚も人々を触発し続けているといえましょう。

(訳; 山上千鶴子 2015/04/20)

参考文献

- Alvarez,A.&Reid,S.(1999). Autism and personality: Findings from the Tavistock Autism Workshop.London:Routledge.
- Bick,E.(1964). Notes on infant observation in psychoanalytic training.
International Journal of Psychoanalysis,45,558-566.
- Bion,W.R.(1962). Learning from experience.London:Heinemann.
- Boyer,D.,&Sorebsen.P.(1999). Adapting the Tavistock model of Infant Observation to work in the neonatal intensive care unit. Psychoanalytic Inquiry,19(2),146-159.
- Briggs,A.(Ed.)(2002). Surviving space.London:Tavistock/Karnac.
- Briggs,S.(1997). Growth and risk in infancy.London:Jessica Kingsley.
- Emanuel,L.& Bradley,E.(2008). What can the matter be?.London:Tavistock/Karnac.
- Gretton,A.(2006). An account of a year's work with a mother and an 18 month old at risk of autism. International Journal of Infant Observation,9(1),21-34.
- Harris,M.(1987). The Tavistock training and philosophy. In Collected Papers of Martha Harris and Esther Bick. Strath Tay, Scotland:CluniePress.
- Hollway,W.(2007). Afterword. Infant Observation,10(3),331-336.
- Hrdy,S.B.(2000). Mother nature. New York:Vintage.
- Joseph,B.(1989). In E.Spillius&M.Feldman(Eds.). Transference :the total situation.
In Psychic equilibrium and psychic change.London&New York:Tavistock/Routledge.
- Klein,M.(1935/1975). A Contribution to the psychogenesis of manic depressive states.
In The writing of Melanie Klein (Vol.1). London:Hogarth.
- Magagna,J.(1987). Three years of infant observation with Mrs.Bick.
Journal of Child Psychotherapy,13,(19-39).
- Negri,R., & Harris,M.(2007). The story of infant development. London:Karnac.
- Panksepp,J.(1998). Affective neuroscience:The foudations of human and animal emotions.
New York:Oxford University Press.
- Reid,S.(Ed.)(1997). Developments in infant obsevation. London:Routledge.
- Rustin,M.E.(1989). Encountering primitive anxieties.
In L.Miller, M.E.Rustin, M.J.Rustin & J.Shuttleworth(Eds.),
Closely observed infants. London:Duckworth.
- Rustinn,M. & Bradley,J.(2008). Work discussion. London:Tavistock/Karnac.
- Rustin,M. & Miller,B.(2002). Observation observed. A film.London:Tavistock Clinic Foundation.
- Sowa,A.(2002). Sustained thinking and the realm of the aesthetic in psychoanalytic observation. International Journal of Infant Obsevation,5(3),24-40.

Stern,D.N.(1985). The interpersonal world of the infant: A view from psychoanalysis and developmental psychology.New York:Basic Books.

Sternberg,J.(2005) .Infant observation at the heart of training. London:Karnac.

Urwin,C.(Ed.)(2007). International Journal of Infant Obsevation,10(3).

**※原典; Esther Bick's legacy of infant observation at the Tavistock
—some reflections 60 years on**

by Margaret Rustin

International Journal of Infant Observation

Vol. 12, No. 1, April 2009, 29—41

尚、この論文は

【The Tavistock Model】 Marth Harris&Esther Bick、Eedited by Meg Harris Williamsa, Karnac(2011)の中の AppendixⅢ pp.375-390 に再録されている。
